

縄文時代の木のうつわ

はじめに 鳥浜貝塚は、三方上中郡若狭町鳥浜字高瀬に所在する、縄文時代草創期・早期・前期の低湿地性の遺跡です。遺跡が営まれた場所は、現在、^{はすがわ}鱒川と高瀬川が合流する地点一帯の標高1m～数mの地下に埋まっていますが、およそ6000年前の当時は、湖のほりりでした。

地中にあった鳥浜貝塚は、大正14年から昭和4年にかけて、鱒川の付け替え工事で掘削が行われた際に、見つかりました。その後、1962年(昭和37)から1985年(昭和60)にかけて、河川改修などの工事にともない、10次にわたる発掘調査が行われ、様々な生活残滓が発見されました。通常なら腐って形が残らない動物質や植物質の遺物までも、良好に保存されていました。



写真1 鳥浜貝塚の位置

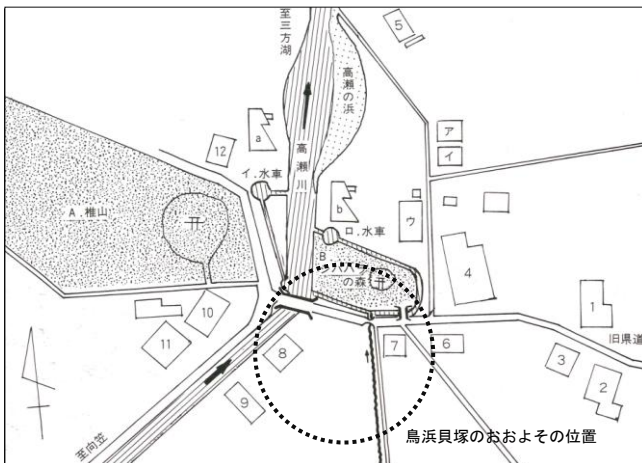


図1 鳥浜貝塚周辺の地形模式図(大正3年以前)

木のうつわ 良好に保存されていた植物質の遺物の一つに、木製のうつわがあります。1980年から1985年の6次にわたる発掘調査で、104点の木のうつわが見つかりました。これらは、木取りの違いにより、「横木取り」のもの、「縦木取り」のもの、幹にできる「瘤」や「根材」を利用したもの3群に分かれます。「横木取り」は、うつわを横から見た時に年輪が同心円状に見え、「縦木取り」は、うつわを上から見た時に年輪が同心円状に見えます。

器種が推定できるもののうち、横木取りのうつわは73点と多く、形は大きく分けて「皿」、「鉢」、「椀」の3種類があります。平面形が円形のもの、楕円形のもの、長方形のものがあり、高台が付く

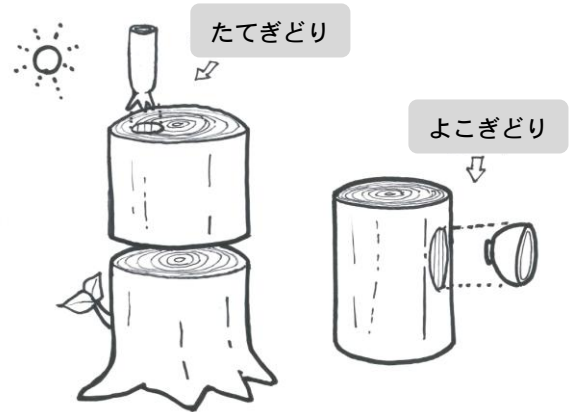


図2 横木取りと縦木取り

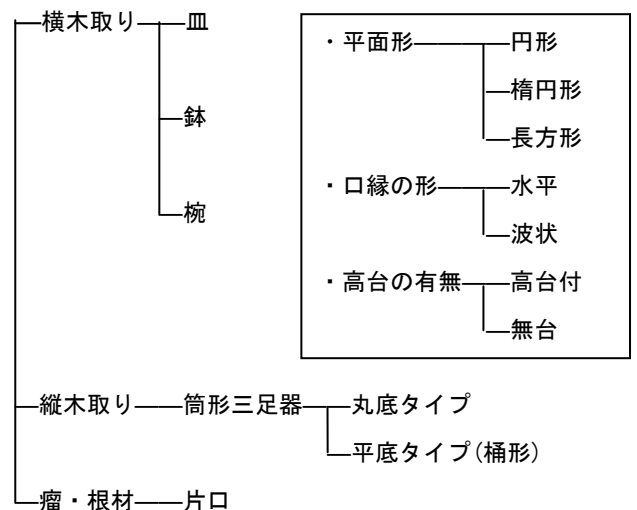


図3 鳥浜貝塚の木製容器の形

ものと付かないものがあります。縦木取りのうつわは18点で、いずれも筒形三足器です。筒形三足器とは、筒状でうつわの底に三本の足が付く容器です。丸底のものと平底で桶のような形のものとがあります。木の瘤や根材を利用したと思われるうつわは4点で、片口の容器です。

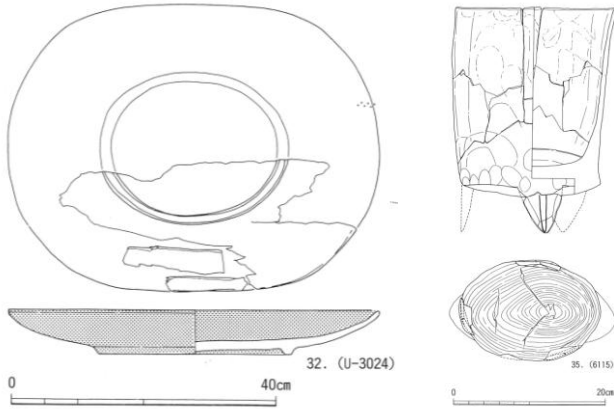


図4 鳥浜貝塚出土木製容器実測図 高台付皿と筒形三足器



写真4 鳥浜貝塚のアカマツ製の鉢(左)とケヤキ製の椀(右)



写真5 鳥浜貝塚の筒形三足器

木の種類 うつわの約51%がトチノキで作られており、ケヤキが約13%、ケンポナシ属が約12%、

クリが約11%と続きます。トチノキは前期を通して、うつわに多く用いられた樹種です。また、他の器種に遅れて出現する筒形三足器には、クリがより多く用いられました。

当時、鳥浜貝塚の周りの森にはトチノキやケヤキ、ケンポナシ属の木は、少ししかありませんでした。つまり、鳥浜貝塚の人々は、うつわを作る材料として明らかに木の種類を選んでいたのでした。

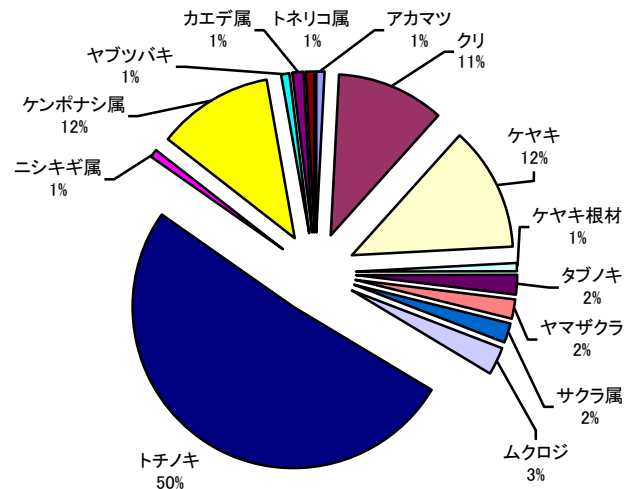


図5 鳥浜貝塚出土木製容器の樹種の内訳

展示品リスト

名称	木の種類	大きさ(cm)
片口	トチノキ	28×11
掬い具(匙形)	ヒノキ	32×3.5
鉢	アカマツ	40×34.5
掬い具(しゃもじ形)	ヤブツバキ	18×7.4
高台付鉢	ケヤキ	17×11.5
椀	ケヤキ	15×8.9
筒形三足器(丸底)	クリ	22.5×13.5
筒形三足器(丸底)	ムクロジ	30×6

主な参考文献

- 上野晃 1984 「3. 鳥浜貝塚周辺と鱒川新設以前の地形」『鳥浜貝塚 1983 年度調査概報・研究の成果—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査4—』 福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館
- 森川昌和・橋本澄夫 1994 『日本の古代遺跡を掘る1 鳥浜貝塚 縄文のタイムカプセル』 読売新聞社
- 網谷克彦編 1996 『鳥浜貝塚研究1』 福井県立若狭歴史民俗資料館

平成27年5月1日発行

発行 福井県立若狭歴史博物館

住所 〒917-0241 福井県小浜市遠敷2-104

電話 0770-56-0525